

## 東アジア・中央アジア分科会および西アジア分科会 合同分科会

日時： 平成 20 年 6 月 5 日(木)

場所： 東京文化財研究所 第一会議室

出席者： 青木繁夫、早乙女雅博、林俊雄、渡辺邦夫(以上、東アジア・中央アジア分科会委員)、  
前田耕作、西秋良宏、岡田保良、八尾師誠(以上、西アジア分科会委員)

石田恵実子(文化庁)、清水真一、山内和也、有村誠、阿部雅史(以上、東京文化財研究所)、豊  
島久乃、田代亜紀子、谷口仁、小角由子(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

### 1. 西安会議報告

前田耕作

報告：2008年6月2日～3日に西安でシルクロードの世界遺産登録に関する会議が行われた。これは、中国と中央アジア5カ国がシルクロードに関連する遺産を世界遺産に登録しようとしているものであり、日本は会議には2007年4月から参加している。2007年4月参加時には、既にシルクロード登録に関する基本構想（concept paper）が会議に提出されており、日本を含む西安から西とシルクロードの関係はそこから欠落していた。これを受けて、2007年10月に西安で開かれたシルクロード会議では、地中海と東方世界も視野にいれたシルクロード構想の提案を用意したが、発表の機会は与えられなかった。

今回の会議には、アフガニスタン、日本、イラン、イタリア、モンゴルの5カ国にも発表の時間が設けられた（イランとイタリアは不参加）。1日目には、登録申請内容をさらに深めるため、登録を推し進めている各国の発表があった。その後、日本側の発表前に中国側からの要請により、2国間協議を設けることになった。日本側は外務省の斎藤純氏、東京文化財研究所の山内和也氏、前田耕作の3人が参加した。一方中国側は、中国考古学会会長、世界イコモス副会長、中国国家文物局の文化財保護局長、国家文物局世界遺産課長など5名が協議に参加した。協議においては、シルクロードの定義の中に、日本、中国、韓国との関係を示した文言を含んでほしいという要望をだしたが、同意を得られなかった。さらに、シルクロードの地理範囲を決定する際は少なくとも東アジアについては何らかの言及がほしい、ということを示したが、既に採用されているコンセプト・ペーパーに対して修正をいれていくのは厳しいということであった。

その後、日本側の発表を経て2日目には、再度中国からの要請で協議の場が設けられ、そこでは中国側から何らかの形で日本と韓国を考慮するという申し出があった。難しい問題は、地理的範囲も含めて既に会議に提出されているコンセプト・ペーパーについてであり、南アジアはとにかく東に関しては入れにくいとのことである。国としては「西安の西」としてきたが、そののち洛陽の要求で洛陽までは入れた。このような事情もあり、さらに東

について動かすことは難しいとのことであった。しかし、日本としては、ここで東方を除外されてしまうと将来的な展望にも非常に問題があるので、「東アジア」についてどうしても配慮してもらうように再度申し出た。これを受けて会議の後半には、「東アジア」についても文言として表現していただくことで合意を得た。

**補足（山内和也）**：コンセプト・ペーパーは申請国が作成するものであるため、当事国ではない日本としては強く意見できないが、将来日本の文化遺産がシルクロード関係の文化遺産として登録される可能性を排除しないでおくことを考えて提案をした次第である。本提言がシルクロードの世界遺産登録を妨げるものではない、という事と、長安が起点であることは認識している、という点は明らかにしてきた。

今回の会議では中国と中央アジア5国に各国で進められている登録申請準備について、中国は準備が進んでいるのに対して、中央アジア5カ国はなかなか進んでいないという印象を受けた。加えて、コンセプト・ペーパーがイコモス専門家により作成されたことについては申請書の評価にイコモスが深く関与していることを考慮すると、疑問がある。

- ・キルギスや中央アジアの国々では、申請書がユネスコとドナー国が共同で作成されることが多いようである。

- ・イコモスが申請書作成を受けたという話は聞いていない。西安にイコモス保存センターというのがある。そこが仕事を受けていたのかもしれない。

- ・これらシルクロード沿いの文化遺産の世界遺産登録は2011年を目指しているということである。

- ・今回の会議では、シルクロード地図というものを提出した。日本においては、小学校で使用されているシルクロードの地図も、非常に精密に描かれており、長安から日本は「遣唐使・遣隋使の道」として明記されている。しかし、シルクロードが世界遺産に登録されるとしたら、より正確に教科書では描かれなければならない。また、国立情報学研究所が実施しているデジタル・シルクロード・プロジェクトで作成された地図を提出した。このデジタル・シルクロード・プロジェクトはユネスコと共同で実施しているが、今回の世界遺産登録に際してのコンセプト・ペーパーのシルクロード構想とは違うものである。これら地図の提示により、最終的に会議ではローマと奈良までがはいっている地図が使用された。このように地図情報をきちんとだしていくことも重要であると考えます。

- ・教科書の地図については、公的に文部科学省で考えていただくということをお願いした

い。

・今回の会議での日本による提言は専門家の同意を得たうえで、外務省によっておこなわれていることを付け加えておく。

## 2. モンゴル専門家会議の報告

豊島久乃（文化遺産国際協力コンソーシアム）

**報告：**2008年3月27日に開催された東アジア・中央アジアおよび西アジア分科会における意見をうけ、モンゴルでの文化遺産国際協力のあり方について議論を行うため、5月30日にモンゴルで活動する専門家による会議を開催した。会議では、2月に実施した協力相手国調査の報告を実施した後、モンゴル側から寄せられたニーズと、日本のもつ強みを勘案した包括的なプロジェクト案に対して意見をいただいた。

（主な内容）①包括的なプロジェクト立案については賛同するが、プロジェクトは目に見える形の短期的プロジェクトと、持続的な長期プロジェクトを組み入れていくことが必要。②無形遺産についての協力について、モンゴル側の保全体制作りをフォローし、制度面の協力および啓発活動をしていくのが望ましい。③モンゴル独特の様式をもつ木造建造物への支援。④人材育成の一環として日本で学位を取得する方法の検討や地方へ届くような協力の検討、等。

これら意見を参考とし、6月9日から予定されているモンゴル出張において、モンゴル教育・文化・科学省と調整を進めていく予定である。

**補足（清水真一）：**1978年から1988年にかけてユネスコがモンゴルの寺院修復を手掛け、日本も文化庁の調査官や宮大工などの専門家をコンサルタントとして派遣したことがあったが、様々な事情により3年ほどで日本は手を引いた模様。それ以来、文化遺産国際協力という点で日本とモンゴルの関係は弱まりつつあるので、今後強化していった方がよい国であると考え。東京文化財研究所は、人材育成という側面から協力をしていきたいと考えている。また、今後（直接東京文化財研究所が実施するのではない）具体的な遺産修復のプロジェクト立案なども行っていけるような長期的な関係を築いていきたい。

**補足（林 俊雄）：**具体的にモンゴルから日本側へ要請のあった遺跡は3か所である。アラシャン・ハダ遺跡、セルベン・ハールガ遺跡、ヘルレン・バルス遺跡である。前者2つは碑文であり、どちらもヘンティ県に位置し、日本の調査団によって発見された遺跡である。両遺跡ともに幸いにして荒らされておらず、その保存については覆屋をするなどの処置により対処できるのではないかとのことだった。ヘルレン・バルス遺跡は、契丹時代のも

のでこの時代のモンゴル国内にある唯一の仏塔である。日本人専門家は過去に関わっていないが、かなり痛んでいるので修復は困難であるとみられる。

・モンゴルと日本とは現在までは文化遺産国際協力に関する関係が弱かったこともあり、これからモンゴル側の希望を聞き、同意書を交わしたうえで新たな関係を築いていこう、ということである。

・モンゴル側から名前が挙がっている3遺跡に関していうと、プロジェクト経費についてはそう膨大な資金がかかるというわけではないと予想している。

・モンゴル側は近辺に資料館のようなものを建設して遺産の説明などをしたいということを考えているらしい。

・ハルレン・バルス遺跡は中国と関連の深い遺跡であるので、中国側が修復支援をしそうだが、なぜモンゴル側は日本に要請をしてきたのか。

→ 中国による修復方法・理念に関してはモンゴル国内でもいろいろ論議がある。

・この3遺跡の修復要請が日本に寄せられた背景には、様々な国々がモンゴルに支援にはいつているなかで、この3遺跡が手付かずであるという背景もあるらしい。逆に、日本が関わっているが修復要請のない遺跡もある。

・モンゴルの文化遺産保存は、支援する国によって、遺跡ごとに保存の方法が違うということか。

→ そういうことになる。

・現段階では調査は盛んに行われているものの、保存まで手がけている例はあまりないというのが現状なのではないだろうか。

・今回の専門家会議については、今後もモンゴル関連案件のアドバイザーとして位置づけ、必要に応じて開催していく。

### 3. アジナテパ保存事業について

#### 3-1. アジナテパ修復プラン

渡辺郁夫（埼玉大学）

報告：アジナテパの修復事業については本年が最終年度となる。ここでは特に、保存修復について今年度考えている計画を報告したい。2007年に、オリジナルの壁の劣化が激しいということで、日干し煉瓦積みをし、その上に壁土を塗るキッピング方式の修復方法をとった。2007年12月になると、アジナテパの最大の構造物であるストゥーパをどのように保存していくかということで、最終的には壁土、もしくは壁土と日干し煉瓦を使って修復していこうということになった。しかし、壁土を塗るにしても壁土のみでは安定が悪いであろうということで、補強なし、木綿縄、棕櫚縄、日干し煉瓦による補強部の実験を2007年11月におこなった。色合いについては問題ないと思うが、問題は被覆層が安定してもつかどうか、という点である。結果、被覆層は、4月に破損がおき、その原因は植生によるものであることがわかった。故に、日干し煉瓦と壁土層による被覆が望ましいのではないかと考えている。この方法については、5センチ～10センチの木杭をいれることが必要であるが、オリジナルの遺構を杭で打つことに対しては反対意見があった。この意見を受けて、今後可能性のある工法は、木杭をオリジナルの層までいれないようにする方法や日干し煉瓦でストゥーパを覆う方法などである。

また、オリジナルの壁土の保存修復に対しては、壁土で覆い保護する方法をとっていたが、これは壁土被覆層の破損が壁上部でみられた。また、構造物の下部においても破損があった。しかし、何も被覆されなかった壁部分については、非常に早いペースで崩壊が進んでいることがわかっており、早急に対策が求められる。また、オリジナルの壁を公開する意味で被覆部に開けていた窓については、崩壊に加えて植物、小動物による破壊が認められた。この窓については、特に下部の窓は全てカバーしなければならないと考えている。

作業の工程として、ストゥーパの周囲に排水溝を作ることを計画しており、水は地下への浸透排水を考えている。しかし排水溝プランはさらなる検討が必要で、浸透井戸設置場所についても未定である。また、どのような排水溝と浸透井戸構造をつくるかということについては、いくつか案をつくっている。

第1フェーズは、僧院部の壁の崩壊については、崩壊が目立った壁については保存修復処置を行った。第2フェーズはストゥーパ部分の周壁被覆、僧院部分の排水溝の設置をおこない、第3フェーズでストゥーパについては管理・観光用の階段を設置することも考えている。そのほかの予定としては10月に修復終了後の形状図化（写真測量による）、タジキスタン側との景観設計プランを策定することを考えている（7月再開予定）。また、プロジェクト終了後は、メンテナンスや将来的な学術交流を考えて、タジキスタン修復技術者の短期招聘や、タジキスタン修復技術者の博士課程受け入れなどを考えている。

・遺構の「復元」については話がなかったが、この信託基金プロジェクトの計画は、調査、復元研究、保存修復というような段階的なものだったのか、それともただ対象物を保存してほしい、というようなプロジェクトだったのだろうか。

→ 事業には4つの目的がある。1つは、人材養成を兼ねた修復作業である。また、2つ目はIT技術を使ったドキュメンテーションであった。3つ目は修復に際する科学研究の実施、最後は保存のための必要最低限の考古学調査による事業の実施である。

事業の初めには、まず写真測量により崩壊の程度を把握し、対策を考えた。「復元」という件については、非常に難しい問題であった。様々な状況から壁土と日干し煉瓦で保存をしていくことになったのだが、問題はもともとの遺跡の状況についての情報をどのように提供するかというものが問題となった。つまり、案内板をどのようにするかという問題がでてきているのが現状である。

・現地を訪問した際、例えばストウーパなどは内部の構造についての説明板などがあるのか。

→ ストウーパ内部構造については、よくわかっていない。

・練り土と煉瓦がどのように重なっているか興味があるところであるし、最終的には復元形状がどうなっているのか、というプレゼンテーションのところまで含めた計画が必要なのではないか。

・難しい問題である。ソ連の発掘調査においては完全に掘りきっていないということがある。また、景観については現在非常に変化してしまっている。故に考古調査により外壁の位置を明確にする必要があった。発掘調査については、形をどう理解するか、景観をどのように戻せるかという可能性もふまえて限られた形で行われた。ストウーパについては、1年目しか発掘調査をしていない。現在も内部構造が明らかになっていないこともあって、オリジナルの層に木杭を打ち込むことについては反対意見がでたということである。

・できるだけ触らないで、現状を留めようというのであれば、土をかぶせることもありえるかもしれない。

・事業は3年間プロジェクトなのだが、1年目は記録や保存準備で終わってしまった。やっと2年目に具体的保存方法策定までいった。そして現在3年目である。やはり5年間はないと難しい事業だと思う。

・現地のメンテナンスの体制はどうなっているのか。

→ ソ連崩壊後は、どの省庁が管理するのかという点についてはいろいろ討議があったようだが、現在では文化省がメンテナンスを担当することになったと聞いている。今後は、ストゥーパの内部構造調査についても文化省と科学アカデミーがおこなうことになると思う。文化省が現在一番気にかけているのは景観であるので、それを支援側も踏まえて要請に応じていきたいと思っている。

### 3-2. アジナテパ考古調査報告

山内和也（東京文化財研究所）

**報告：**アジナテパは、タジキスタンの南部に位置する7～8世紀の仏教遺跡である。周辺にはチョルグル・テパ遺跡などが位置する。1960年代からソ連によって発掘がおこなわれた。寺院は塔院区と僧院区によって構成されており、塔院区ストゥーパ東側からは長さ約13メートルの涅槃仏が発掘されている。事業は3年目であり、東京文化財研究所は、保存修復作業に先立つ考古学的調査及びクリーニングを行うということ、部分的調査により外壁のラインを確定するというを実施している。2007年、2008年で発掘調査を実施し、本年度は寺院の外壁範囲を調べるための調査を行った。1960年代の発掘調査により火災によって寺院が焼失されたといわれたが、本調査でもその点が確認された。また、本調査では、塔院区南東の壁についてはベンチ状遺構を伴っていること、涅槃仏のあった部屋へと続く入り口があったことなどが明らかになり、寺院外壁については、東と西でその位置が確認できた。壁画片も出土している。

今回は、アジナテパが歴史的、地理的にみてどのような位置づけとなるのか考察するために、周辺地域についても調査を行った。時代が明らかではないが、シャヒードババといわれる殉教者の墓といわれる場所などである。アジナテパ周辺には遺構が近くになく、その名称の意味が「悪魔」といわれることなど、その歴史的、地理的位置づけについては謎が多い。また、もともと湿地帯、森林であったのが、1950年代に開墾されたといわれている。実際に調査によってこの地域がすり鉢状であることがわかっている。その立地条件については謎が多い。事業に対する考古学調査は、今年が最後となる。

#### 4. 四川地震によって被災した文化遺産

清水真一（文化遺産国際協力コンソーシアム）

報告：四川大地震の後、文化遺産被災については文物管理局によって非常に早い時点で情報が公開されている。5月12日の地震発生から国家文物局は非常に早い対応を行っているといえるのではないだろうか。注目されるのは、5月29日付の西安晩報において報道された文物局の博物館の課長による「日本の文化財保護組織がもつ地震災害の経験を学ぶべきであろう」という所見である。深刻な被害を受けた事例は、地理的にも四川省に留まらぬ甘肅省、陝西省、雲南省、重慶市でも認められている。関連される報道ニュースでわかるように、チベット族も居住する地域があるので、非常に政治的に繊細な対応を求められる地域である。各国の動きとしては、世界遺産の啓蒙活動を手がけている団体などが募金活動を開始している。日本国内においては、各学会が情報収集などを行っているとのことである。また、国としては、イタリア在中国大使館が中国政府に対して支援を表明したとのことである。そういったなかで日本が支援を求められる可能性もあるので、とりあえずコンソーシアムとしては情報の収集に努めている。

#### 5. その他

インド・INTACHによる会議における発表者推薦要請について

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

4月の下旬に日本大使館経由でINTACHよりINTACH主催の会議への発表者推薦の要請があった。会議は2008年12月2日～4日にニューデリーで開催される予定であり、会議は芸術遺産（Art Heritage）および遺産教育（Heritage Education）をテーマにアジア地域の連携協力を促進することを目標とする。ついては、日本から2名の参加者を招聘希望しており、1名は修復分野（木材、金属、石材、壁画などの様々な材質に関する修復を含む）、もう1名は遺産教育の分野からの招聘を希望している。

・推薦者については、とりあえず事務局に一任いただけるだろうか。（議長）

（異議なし）



## キルギス出張報告

山内和也（東京文化財研究所）

報告：アジナテパ保存修復事業と関連して、キルギスにおけるユネスコ文化遺産保存信託基金による保存事業の対象である3つの遺跡を視察してきた。アクベシム遺跡、クラスナヤレーチカ遺跡、プラナ遺跡である。

クラスナヤレーチカ遺跡には、保存のために覆屋が建設されていたが、訪問時には竜巻により破損していた。現在は修復されているはずである。アクベシム遺跡は、遺構全体が周囲から見えにくいため、どのように遺跡をみせるかという問題がある。プラナ遺跡（カラハン朝）には、キリスト教、仏教、イスラーム教に関する出土品があり非常に興味深い。現地の不満は何かというと、保存事業がおこなわれたが、ディスプレイが不十分であるということである。保存と公開についての課題がある。

また、ユネスコによる岩絵（岩画）の世界遺産登録についての会議に参加した。2012年の登録を目指しているということである。実際岩画をみていくと、キャンプ・サイトに位置している。そして大抵は、水、岩画、墓、もしくは円形の積石塚のセットとなっている。そういう意味では岩画のみとりあげるのはどうかと思うが、遊牧民の移動経路などとの関連性を考えれば興味深いものだと思っている。問題は、どうやって保護するのかということである。世界遺産に登録するにはマスタープランを作成しなければならないが、人里離れたところにあり、数が多く分散し、日々の寒暖の差が激しい箇所に描かれていることが多い。岩の表面の問題ではなく、岩自体が破損している状態のものもある。覆屋をかけるのも景観の面からみて難しい。しかし、ドキュメンテーションという意味ではいろいろなことを行っている。この登録申請に関しても、イコモスが主導的な役割を果たしている。

・登録のために書類をつくることについては、ユネスコが支援できるようになっている。ユネスコは資金を援助するだけでなく、人的な支援として紹介した専門家が結果としてイコモスだったということだと思う。

・登録基準などについては、イコモスで紹介された専門家が詳しいので有意義だと思うが、実際の遺跡について詳しいかどうかは考古学者からすると疑問である。

以上